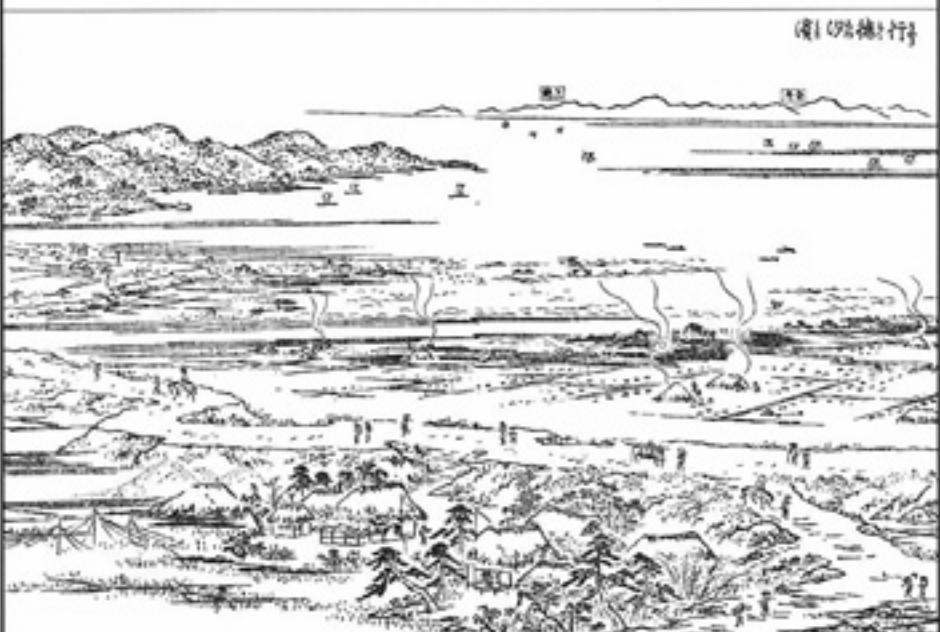


市川の散歩道

# 行徳塩浜の みちを歩く



市川市教育委員会

## 行徳塩浜のみちを歩く

～～製塩と水運で発展した行徳～～

現在の行徳海岸は戦後の埋立事業によってコンクリートの海岸に変わってしまい、地下鉄東西線、高速湾岸道路(国道357号線)、JR京葉線などの敷設によって、ますます様相が一変してしまいました。

その昔、青松白砂の海岸に塩田がつくられ、塩焼きの煙が昇る情景は「江戸名所図会」(表紙参照)の挿絵によく現れていますが、今日ではとても想像できるものではありません。

行徳の塩業は既に千年以上も前から行われていたといいます。当時の行徳は江戸川の形成したデルタ地帯で、その海岸線は東西線に並行して走るバイパスの辺りであったと考えられます。

小田原の北条氏が天文・永禄の二度にわたる国府台合戦で里見氏の勢力を撃退してからは、行徳で生産された塩を年貢として取り立てたといわれていますが、北条氏滅亡後、徳川家康が関東を治めるようになりますと、家康はこの行徳の塩業を重視し、行徳を直轄領として治めました。

この家康は東金に幾たびか狩獵に出かけましたが、そのとき船橋に御殿を造り、そこを中継地点

として休憩、宿泊に当てました。家康はそのおに集め「塩は軍用番の宝である」

奨励金を与え

この東金狩徳を通った道と呼ばれ、いの寺町を通る道伝えられています。

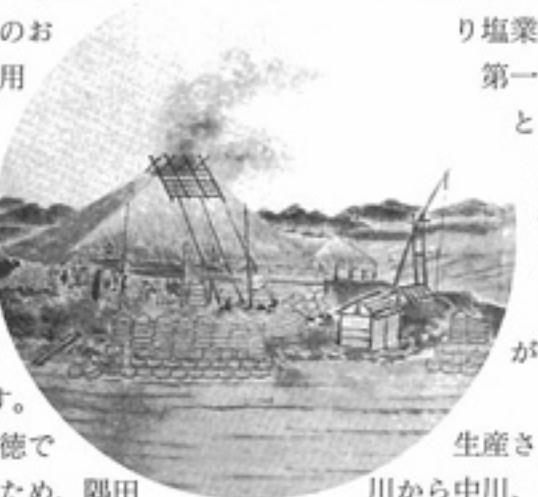
また家康は行徳で江戸へ運ばせるため、隅田

へと運河をつくりました。この運河を「行徳川」と呼びましたが、やがてこの運河の権益を本行徳村が独占し、新たに船着場が作られたのが新河岸といって、現在の本行徳に残る常夜灯の処でした。

この行徳を治めた代官に吉田佐太郎がおります。彼は相之川の了善寺に陣屋を置き、製塩奨励のため「塩浜の開発には五ヵ年間の諸役を免除し、その後は生産高の十分の一を年貢として納めればよい」という触れを出しています。

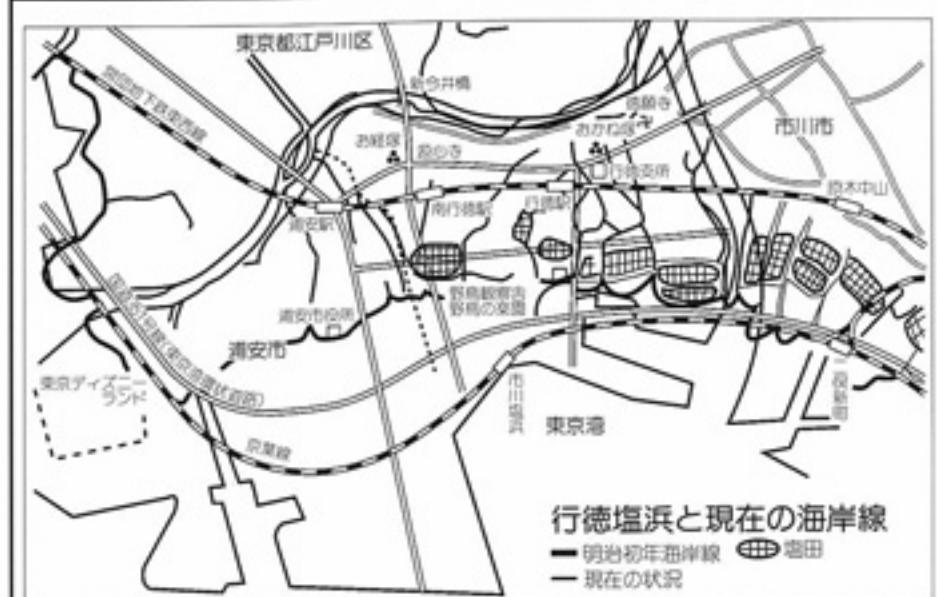
塩田開発についてはこのほか、慶長年間(1596~1615)には河本弥左衛門が関西からこの地に来て、干潟やアシの原野を開拓し、塩田をつくって塩焼きの製法を教えたところから、今日にまで「塩焼」の地名が残ったといいます。弥左衛門は出家して宗玄和尚となり慶長5年に建立したのが法善寺で、一般には塩場寺と呼ばれています。

また、寛永年間(1624~44)田所長左衛門が近江国(滋賀県)信楽から行徳に来て製塩に従事したといい、江戸神田の儀平衛は、寛保3年(1743)



生産された塩を直接川から中川、そして江戸川

第一の品、領内一  
といつて多額の  
たといいます。  
獵のときに行  
が「權現みち」  
までも本行徳  
がそれであると



塩浜を開発して儀兵衛新田と称し、江戸横山町の加藤作兵衛が、安永4年(1775)開発した塩田を加藤新田と称しました。

このようにして塩田の開発に力が注がれましたが、一方では田畠の開墾にも目が向けられていました。しかし、行徳は砂洲で形成されているため、真水を得ることが困難でした。

この困難を克服して大柏川から浦安に通じる灌漑用水路を作ったのが狩野淨天と田中内匠です。共に北条氏の旧臣として行徳・浦安の開発に当った人たちです。この水路は「内匠堀」または「淨天堀」と呼ばれ、一時は行徳地域で一万石の水田を潤したといわれていますが、現在ではすべてが暗渠となっていました。

塩を運ぶためにつくられた行徳川は、やがて江戸の文化がいち早く行徳に広まるパイプの役を果たしました。この水路を利用して往来した人たちの中には松尾芭蕉・十返舎一九・大原幽斎・渡辺翠山などをはじめ、成田参詣のための多くの庶民や、商いのための商人たちがおりました。こうした人たちによって、船着場周辺は非常な賑わいを示しました。

また、関東奥地や銚子からの物資が、江戸川を通じて江戸へ運ばれたため、行徳には多くの荷物運搬船や客船が往来しました。

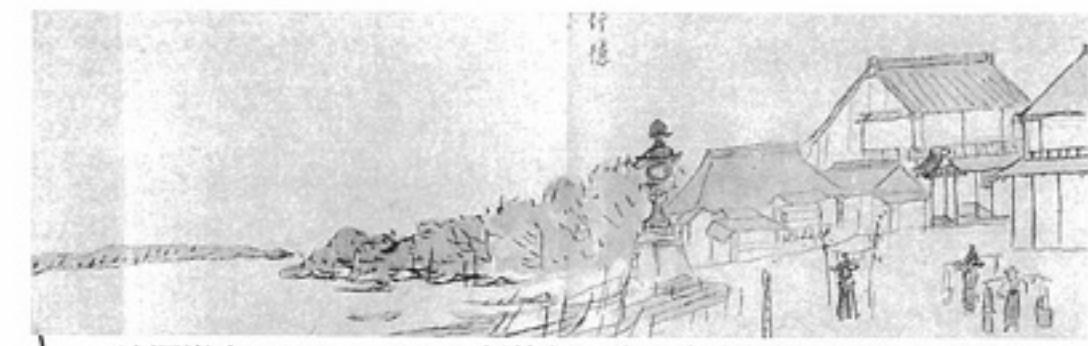
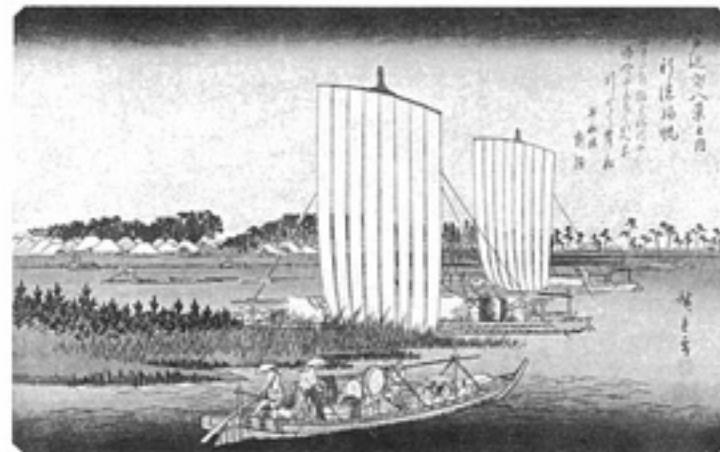
そして明治になると船船や帆船にかわって、大きな車輪をつけた蒸気船「通運丸」が就航し、行徳の水運業も一層発展していったのですが、明治27年総武鉄道が開通すると、輸送は鉄道に取られ行徳は火の消えたような町になりました。

しかも、塩業はだんだんと衰退し、その中心地は船橋へと移って行きました。そして大正6年に起った大津波で塩田はほとんど壊滅してしまい、再起することが出来なくなりました。

明治に入ってから取り入れられた海苔養殖が、わずかに行徳の水産業を支えてきたにすぎません。

それが昭和30年代の埋立事業、44年の東西線の開通と共に一躍活気を呈し今日のような行徳の町によみがえったのです。古い時代の歴史を懐古しながら、新しい行徳の町を見て歩くのも、また興味あることではないでしょうか。

# ありし日の塩浜を偲んで 行徳のみちをあるく



渡辺華山のスケッチした行徳新河岸の常夜灯(四州真景図巻)

江戸時代から明治の始め頃までは、この絵に見るような大きな帆を張った船や「行徳舟」と呼ばれた定期船の航行で江戸川（現在の旧江戸川）は賑わいました。  
(安藤広重・行徳帰帆・天保9年)

明治10年、国内通運会社が利根川筋に就航させた、蒸気船「通運丸」

行徳新河岸に停泊する「通運丸」  
(成田土産名所尽・3代広重・明治23年)

